

## 音に命が宿る

関東支部 2012年度「エグゼクティブセミナー」

ヴァイオリニスト **千住 真理子** 氏

**せんじゅまりこ** 2歳3カ月よりヴァイオリンを始める。全日本学生音楽コンクール小学生の部全国1位。NHK交響楽団と共演し12歳でプロデビュー。日本音楽コンクールに最年少15歳で優勝、レウカディア賞受賞。パガニーニ国際コンクールに最年少で入賞。慶應義塾大学卒業後、指揮者故ジュゼッペ・シノーポリに認められ、1987年ロンドン、1988年ローマデビュー。以後、国内外でのコンサート活動、国際親善活動、講演会やラジオなど多方面で活躍中。『聞いて、ヴァイオリンの詩』『母と娘の協奏曲』(母との共著)など著書多数。



写真：富田真光 (Vale.)

### きっかけはアインシュタインのヴァイオリン

私は、2歳3カ月のときにヴァイオリンと出会いました。ヴァイオリニストの多くが音楽家の両親を持っているのに対して、私の家は音楽とは無関係の学者の家系です。そのような私が、なぜヴァイオリニストになったのか。考えられる一つのきっかけは、物理学者だった母方の祖父母がドイツへ留学したとき、船上でヴァイオリンを弾くアインシュタインに出会ったことです。そのすばらしい演奏に深く感動した祖父母は、ぜひ孫にヴァイオリンを弾かせたいと思ったようです。3人兄弟の中でも特におじいちゃん、おばあちゃん子だった私に、その夢が受け継がれたのかもかもしれません。

幼い頃はプロになる気持ちなどももちろんありませんので、好きなきときにヴァイオリンを触って遊んでいました。当時、日本の著名なヴァイオリニストのほとんどがその門をくぐったと言われる鷺見三郎先生の門下生だった私の周りには、プロを目指す天才少女・少年たちが大勢いました。同年代のすばらしい演奏を聴けば、当然、自分もそうなりたいと思います。私が本当にヴァイオリンに目覚めたのは、彼らに混じってプロへの登竜門とも言えるコンクールを目指した小学校4年生のときです。コンクールのための練習会では、初めのうちは「あなたも出るの?」と笑われるような技術でしたが、猛練習を積み、みるみる上達していきました。

コンクールは2位という結果でしたが、このとき生まれて初めて悔し涙というものを知りました。私はその悔しさから脱却したい思いで、さらに練習を重ね、翌年再び出場したコンクールで1位を取ることができました。

### 12歳でのプロデビュー

コンクールで1位を取ってしまうと、次の目標として、私の中に「プロになりたい」という気持ちが芽生えてきました。嬉しいことに、小学校6年生のときにお話をいただき、クラシック界では異例の早さの12歳でのプロデビューが決まりました。デビューと同時に師事した江藤俊哉先生は私に、「天才少女と呼ばれているあなた

が下手になったら、私が駄目にしたと言われてしまう。だから、いつも天才らしく弾いてくれなければ困る」とおっしゃいました。子供だった私は、その言葉をそのまま受け取り、「天才らしい演奏とはどのようなものだろう」と真剣に考えました。そして、曲の速い部分を誰も弾いたことがないくらい速く弾くと、拍手喝采してもらえることがわかり、私は次から次へと聴衆が驚くようなものを弾いてみせるようになりました。こうして天才少女の呼び名は、確かなものになっていきました。

コンサートやレッスンに明け暮れる一方、ヴァイオリンと学業を両立させることが大きな悩みになっていました。中学や高校時代を通して、一方を頑張れば一方がおろそかになるシーソーゲームを繰り返していました。さらに私の中には、「天才少女と言われ続けなければならない」というプレッシャーが常にありました。1日10時間、12時間、さらには学校を休んでヴァイオリンを練習してもまだ足りない。筋肉は磨耗し、身体中に湿布を貼って寝ても、翌朝まだその痛みは取れません。それでも、朝6時からまた練習をして学校に行く。そのような毎日を繰り返しているうちに、私はいったい何をやっているのだろうという疑問を抱くようになりました。毎日、恐怖感に追われるように限界まで練習して、ステージに出る。それでも上手に弾けるとは限りません。上手に弾けなければ、たちまち評論家に酷評されてしまう。一生このようなことが続くのだろうか。私は、鉛のように重いもので身体が押しつぶされるような、逃げ場のない気持ちになっていきました。

### ヴァイオリンから離れた2年間

プロと学業の両立に悩んでいた17歳のとき、映画「火の鳥2772」の音楽を演奏したご縁で、漫画家の手塚治虫先生と出会いました。自分の将来についての悩みを打ち明けると、先生は「私も漫画と医学の二足のわらじを履いたが、二足のわらじは、一方が行き詰まったときに解放の道を与えてくれる。だから、両立は大変だけれども、二足のわらじを履き続けることを期待する」、そして「17歳は、まだロボットのようなもの。人間になるためには、もっともつといろいろなことを経験していかなければならない。音楽

もこれからだ」とおっしゃいました。そのときはまだ、その言葉の本当の意味はわかりませんでした。今なら、私は確かにロボットだったと実感できます。なぜなら、当時の私は、どんなに難しい曲でも弾けるという自負があり、皆を驚かせることばかり考えていました。しかし、何でも弾けるからと言ってそれが何なのだろう。もうやることのない、私は頂点まできてしまったと、凶々しくも感じていました。「天才弾き」のノルマを淡々とこなしながら、無味乾燥な日々を送る毎日。音楽で人が感動することはなく、感動しているフリをしているだけだと思っていました。さらに、早くから大人の世界に入った私は、いじめや嫉妬などさまざまな事件にも遭遇しました。美しい音楽に携わる人間がそんなことでよいのだろうかという矛盾も感じ始めていました。

そして20歳になったとき、身体と心の疲れはとうとう限界まできてしまいました。私はその苦しさを初めて母に相談しました。母は、「辛い思いをさせてしまって、ごめんなさい」と、私と一緒に泣いてくれました。私はそのとき、ヴァイオリンをやめて、これからはよい娘として、素敵な女性として、人間として幸せに生きていきたいと思いました。兄たちも、「精いっぱいよく頑張ったね」と言ってくれました。ただ父だけは、口をきゅっと真一文字に結び、「残念だね、悔しいね、やめてしまうのかい」と言いました。そして、「ダイヤモンドという石は、原石は美しくないけれど、何回も磨いて初めて輝くようになる。真理子も自分がダイヤモンドだと信じて頑張り続けることはできないのか」と繰り返し言いました。今の私ならば、例えば自分がただの石ころでも、磨いたり彫刻したり自分なりの形にしていけば、世界に一つしかない宝石になれると思いますが、そのときの私は、頑張ったことを一番褒めてほしかった父への反発もあり、その言葉を受け入れることができませんでした。

20歳からの2年間、私は毎日、ヴァイオリンのことを忘れようと努めました。しかし、私がヴァイオリンをやめた本当の理由は、プロとしての活動が苦しかったため、ヴァイオリンが嫌いになったわけではありません。そこにまた、矛盾が生まれます。心はその葛藤で苛まれ、非常に苦しい日々を送っていました。



## 本当の音楽と出会う

ヴァイオリンから遠ざかっていたある日、ホスピスを運営されている団体の方から、末期の患者さんの一人が私のファンなので、ぜひ会ってほしいというお話をいただきました。お会いするだけということでしたが、ヴァイオリニストらしく一応ヴァイオリンケースを抱えて出かけました。お痩せになってはいましたが、とても嬉しそうな顔をしてくださったその方に、私はヴァイオリンを弾いてあげたくなり、リクエストされたエルガーの「愛の挨拶」をうろ覚えで弾きました。まったく練習していませんでしたので、当然ながらひどい演奏でした。しかし、その方は目に涙をためて、「千住さんありがとうございます。生きていてよかった」と、何度も何度も握手を求めてきました。「生きていてよかった」と言われた私は、「何てひどいことをしてしまったのだろう。私は今、自分の人生の中で一番ひどい音を出してしまった」と激しく後悔し、走るように家に帰り、練習を始めました。ただただ、申し訳ないという気持ちでした。しか

し、それが再出発の第一歩となったのです。その方は残念ながらお亡くなりになりましたが、それから私は何かを取り戻すように、ホスピスや老人ホーム、孤児院を訪問して演奏しました。

そのようなボランティア活動を通して、ふと、音楽ってこういうものなのかなと気づき始めたのです。2歳3カ月から20歳まで、私が演奏していたのはヴァイオリンという楽器であって、音楽ではなかった。音楽とは、血が通い、心が通い合い、人の心を温かくしてくれるもの。私のぼろぼろになった心と身体は、一生懸命に聴いてくださる方々の温かさで、逆に慰められ、いつしか癒やされていました。私は、生まれて初めて本当の音楽に出会ったのです。



## 再びヴァイオリニストの道へ

私は再びヴァイオリニストへの道を歩もうと決心しました。しかし、2年間のブランクは、本当に大きなものでした。プロに必要な感覚がなかなか戻らないのです。やめていた期間と同じ2年間が必要と覚悟し、恥をかきながらひたすら演奏会に臨みました。しかし、2年経っても思うように弾けません。それなら倍の4年頑張ろう。そう思えたのは、私には、本当の音楽をやりたいという目標ができたからです。ヴァイオリンで人々と感動を分かち合いたい、音に自分の命をのせたいという大きな志がありました。

しかし、5年経ってもまだ感覚は戻りません。これはもう、神様が私を許してくれないのかもしれないとまで考えるようになった7年目、いつものように葛藤しながらステージの上で演奏を始めて10分くらいしたとき、思いもよらぬことが起きました。すべての感覚が一瞬にして戻ったのです。それは、何の不安もなく感覚だけで自由自在に弾ける、長い夢から覚めたような、霧が晴れたような感覚でした。「これだ、この感覚だ」私は喜びのあまり、身体中の震えが止まりませんでした。「神様どうもありがとう、私はもう絶対にヴァイオリンを手放しません」何度もそう思いながら、私は演奏し続けました。

今でも、この感覚がなくなってしまうのではと、ふと不安になると、「今日だけは弾かせてください。もう二度と弾けなくなっても後悔しないように、真心を込めて弾きますから」と祈りながら演奏します。演奏会のすべては、一期一会です。今のこの瞬間の音楽が、私にとって何よりも大切なものであり、私が生きている証しそのものなのです。

昨年3月11日の東日本大震災以来、東北のさまざまなところで演奏をさせていただいています。辛い思いをしている方々が目に涙をためてじっと聴いてくださったり、「音楽って本当に温かいですね」という言葉をかけてくださったりする中で、音楽には人々の心やその場の空気を温かくする大きな力があることを、心から実感することができました。このすばらしい音楽を通して、さまざまな人々と心で通じ合いながら、私はこれからもヴァイオリンを弾き続けていきたいと思っています。

